

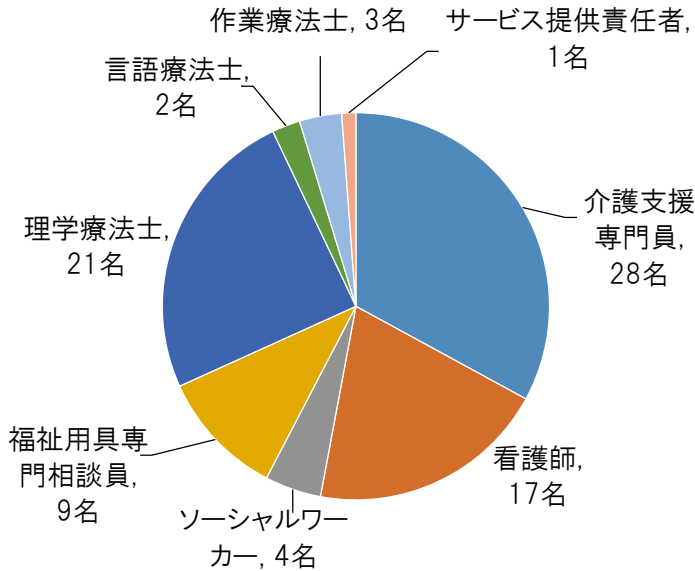
目黒区 多職種ワークショップ 報告書

「本当のチーム力を高めよう ～専門職が集まるだけでチームなの？～」

日時：2019年11月29日(金) 18:30～20:00

会場：目黒区総合庁舎 大会議室

参加者 85名 職種内訳



<研修の様子>



<図面を配布>

【事例概要】

現在、回復期リハへ入院中の72歳男性 168cm 75kg程度
 脳梗塞にて、右片麻痺、運動性失語あり
 発症前ADL自立。独居(婚姻歴なし)。両親は逝去。弟は疎遠。
 食べる事(外食)が好き。糖尿病、喫煙、飲酒歴あり。
 屋内は装具着用+伝い歩きレベル 屋外車いす(通院用)
 要介護3 退院にあたり、ケアマネジャーを新しく選定。
 10階建てのマンションの3階に住んでいる(購入、ローン完済)。
 エレベーターあり。自宅の図面参照
 持ちベッド(シングルサイズ、ベッド下収納あり)の希望あり



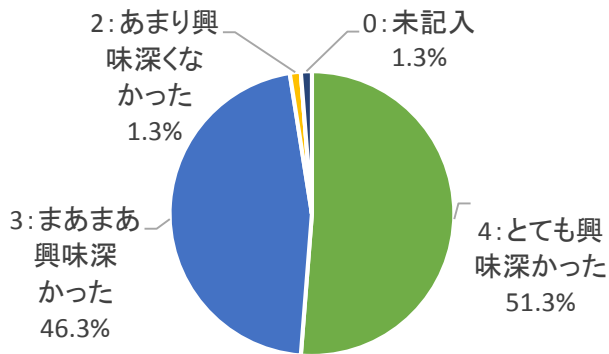
上記事例に対し、下記3つの生活目標から一つを選び、その目標に向けてどうするか、グループディスカッションを行った。

- ① 「昼夜ともに自宅のトイレでの排泄が自立する」
- ② 「ヘルパー軽介助～見守りの下、自宅の浴槽で入浴できる」
- ① 「50メートル先のコンビニにヘルパーと行く」

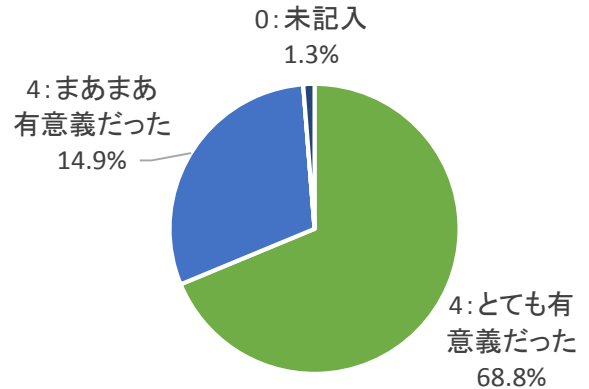


<アンケート結果>

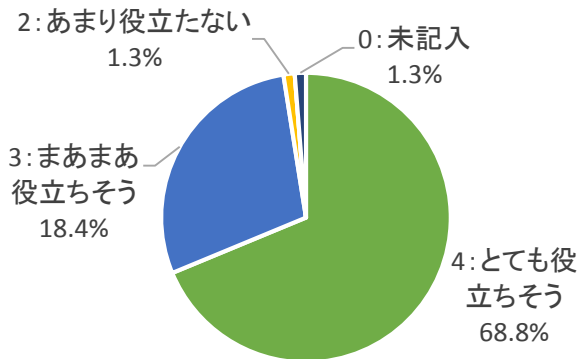
問1: 内容の興味深さ



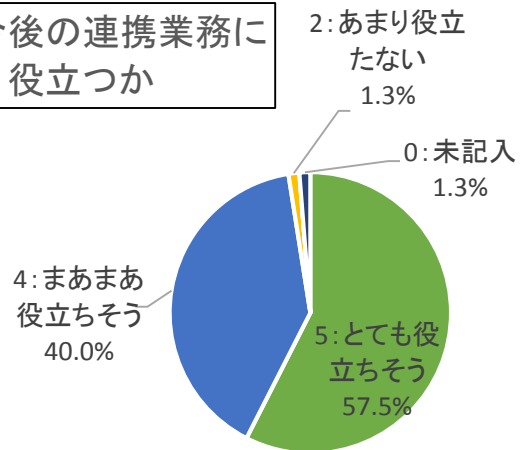
問2: 有意義さ



問3: 他職種理解に役立つか



問4: 今後の連携業務に役立つか



今回、研修の企画段階で、理学療法士、作業療法士、福祉用具支援専門員の方々に事例概要やディスカッション方法に対する意見をもらい、内容を組み立てた。

企画側として、福祉用具専門相談員との連携強化を掲げ、福祉用具専門相談員に対し積極的な参加を募り、かつ、福祉用具や住宅改修の具体的なイメージが湧きやすいよう討議のツールとして間取り図を使用した。そのことにより、福祉用具専門相談員の全員から「有意義なディスカッションが出来た」「今後の連携に役立った」との回答を得られた。

アンケートでは、「病院側とケアマネ、在宅側での生活、ADLレベルには認識の差があった。差が埋められるようなカンファレンスを設け、退院後の不安が少しでも減らせるようにしたいと感じた。」といった、職種間の視点の違いだけでなく、働く場(回復期と生活期)によっても視点が異なることへの気づきを得た意見もあった。視点が異なるからこそ、多職種、そして同職種同士でも協働することが必要であり、あらゆる視点から物事を多角的に捉えることが、利用者一人一人の多様な「LIFE」を支えることにつながるのだ、ということ学ぶ研修となった。

「グループワークだと有意義に話し合えるのに、現場だとつまらなくなってしまう」という声も聞かれた。それは、課題ではあるが、研修のような討議を、日常の制約ある業務の中でそのまま実践するのは難しいとも考えられる。この研修の討議そのものを実践できなくとも、多職種での討議の有用性を理解し、そのことを意識することで、多職種連携、情報共有が進むのではないかと考えられた。